第四回

# 邦楽演奏会

'74都民芸術フェスティバル

昭和四十九年二月三日（日）

第一部　十二時半開演　四時終演
第二部　四時半開演　八時終演

第一生命ホール

主催　邦楽連合会

社団法人　義太夫協会
中央区銀座六の十八の二
新橋演舞場別館
電話　（五四一）五四七一番

清元協会
港区南青山二の十七の十三の一〇二
電話　（四〇二）〇二四〇番

財団法人　古曲会
中央区銀座八の六の三　新橋会館
電話　（五七一）〇二一六番

常磐津協会
港区南麻布五の三の四十六
電話　（四四四）三〇二〇番

長唄協会
中央区銀座八の十一の九
電話　（五七二）四九四五番

社団法人　日本三曲協会
文京区白山五の二十六の十二
電話　（九四一）二三七六番

（五十音順）

後援　東京都

# 御礼

邦楽連合会

本日はようこそお出かけ下さいまして、ありがとうございました。この会も回を重ねまして、ごらんの通り四回目の演奏会を開催することができました。御協力下さいました皆様に厚く御礼申し上げます。

このようにして、邦楽の各流派が自主的に集まって演奏会を開くということは、今までにあまり例がありませんでした。これからも、この会は続けて行きたいと思っておりますし、またこの催しを土台にして、邦楽について考えたり、話し合ったりして、よりよい明日の邦楽のために努力して参りたいと思っておりますので、今日おきき下さいました御意見や御感想などを、どうぞお寄せ下さいますようにお願い申し上げます。

何かと不行届の点もありましょうが、お許しを願いまして、どうぞ御ゆっくりとお楽しみ下さいますよう、御願い申し上げます。

# 「邦楽演奏会」によせて

東京都知事　美濃部亮吉

東京を平和で豊かな環境の暮しやすいまちにしたいというのが、私の都政における最大のねがいです。そのために、東京に青空をとりもどしたい。緑ときれいな川と安心して歩ける道路を私たちのものにしたい。地震などの災害につよいまち造りをしたい、と私は力いっぱいの努力を重ねてきました。

東京が暮しやすいまちになるためには、さらに文化の香り高い都市であることが必要です。「都民のみなさんが、すぐれた芸術を、気軽に鑑賞していただけるようにしたい」そう考えて、私はこの六年間、芸術文化団体の公演に力をいれてまいりました。

芸術文化は、個々人の最高の精神活動であるだけに、政治や行政が一方的に考えを押しつけるものであってはなりません。

しかし、私がなによりも嬉しいことは、この助成公演を多くの都民のみなさんが楽しんで下さつたことと、ことしも多くの芸術家や芸術団体が積極的に参加して下さつたことです。

この「邦楽演奏会」もその一つです。どうか都民のみなさんが心から楽しんで下さることをおねがいいたします。

# 第一部番組（十二時半開演）

## 一、一中節三番叟

浄瑠璃　都一
同　都一
同　都一
同　都一
同　都一
同　都一

一いき　三味線　都
一和代　同
一妙奈加　同
一澄川　同　都
一せつ　上調子　都

一中
一その
一あさ

## 二、箏曲千鳥之曲

箏替手
吾孫子松
井口秀
橋本琴
櫻井雪
鳳鳳鳳鳳

箏本手
吾孫子静子
小野恵鳳
早川慧鳳
小林隆鳳
奥山喜鳳
中村葉鳳
菅森秀明鳳
小川秀清鳳
飯田恵幸鳳
猪妻恵啓鳳



## 三、清元梅柳中宵月（十六夜）

浄瑠璃　清元寿美太夫
同　清元啓寿太夫
同　清元美寿太夫

三味線　清元栄三郎
同　清元秀二郎
上調子　清元寿三郎

## 四、義太夫　壇浦兜軍記　阿古屋琴責の段

重忠　竹本土佐廣
阿古屋　竹本春華
岩永　竹本越道
榛沢　竹本朝重

三味線　豊澤仙廣
ツレ弾　鶴澤津賀昇
三曲　豊澤公治

## 五、長唄　鷺娘

唄　芳村伊久三郎
同　芳村孝五郎
同　芳村辰三郎
同　芳村伊十禄

三味線　杵屋栄之助
同　杵屋栄徳郎
同　杵屋栄敏吉
同　杵屋栄佐雄

囃子
笛　鳳声晴三久豊夫
小鼓　堅田喜三
小鼓　堅田一
大鼓　藤舎月佐武郎
太鼓　望月太郎

## 六、常磐津　神路山色琫
―油屋縁切の段―

浄瑠璃　常磐津文字太夫
同　常磐津須磨太夫
同　常磐津小文太夫

三味線　常磐津三郎
同　常磐津菊寿郎
上調子　常磐津菊雄



## 七、箏曲　岡康砧

岡安小三郎　作曲
萩岡松韻　編曲

第一箏
湯浅萩野
大沢萩巳音
福田萩紀代
小野寺萩美基
橋本岡葉奈

第二箏
萩岡松韻

第一箏
石川萩弥栄
神田萩美誉
加藤萩悠紀
浜田萩祥泉
竹内岡奈世

第一箏
柏原萩美枝
山崎萩津也
前田萩美栄
市川岡倭文
増田岡曄絵

第一箏
庄司岡
関根岡
櫻田岡
滝本岡
加藤岡昌千世美和扇園

尺八
川瀬勘輔

# 第二部番組（四時半開演）

一、河東節　橋　弁　慶

浄瑠璃　山彦節子
同　山彦綾子
同　山彦ひな子
同　山彦美枝子
同　山彦祐子

三味線、山彦河良
同　山彦荘子
同　山彦さと子
上調子　山彦貞子

二、義太夫　加賀見山旧錦絵　長局の段

尾上　竹本春駒
お初　竹本駒之助
三味線　鶴澤三生



三、地唄曲　鼠

三絃　富山清琴
富信清香
富上清幸
椎木清女
富山美恵子
富田清邦
富山清隆

四、常磐津　神楽諷雲井曲毬（どんつく）

浄瑠璃　常磐津千東勢太夫
同　常磐津宮尾太夫
同　常磐津勘寿太夫
同　常磐津初勢太夫

三味線　常磐津文字兵衛
同　常磐津文字蔵
上調子　常磐津八百二

## 五、三曲櫻川

箏高音
中島雅楽之都
赤嶺雅仁志
高畑雅紫登
西村雅楽佳
櫻井雅詩盈

箏低音
中島靖子
宮本雅都貴
川島雅楽慧
角井雅楽伎
水口雅世

三絃
石井雅楽盈
酒井雅師
冨田雅枫
黒河内雅志賀
間瀬雅志典
福沢雅志富
佐藤雅千盈
阿部雅翠
奥野雅楽菖
河内雅楽友

尺八
高橋鉄川
瀬順輔

## 六、清元〆能色相図（神田祭）

浄瑠璃 清元志寿太夫
同 清元小志寿太夫
同 清元志佐太夫
同 清元志香太夫

三味線 清元栄三郎
同 清元啓輔
上調子 清元志寿朗



## 七、長唄紀文大尽

唄 吉住小三郎
同 吉住小三治郎
同 吉住小真吾
同 吉住小蓮次
同 吉住小桃次
同 吉住小三蔵

三味線 稀音家六四郎
同 稀音家六喜郎
同 花垣嘉秀
同 稀音家助三朗
同 花垣嘉伸
同 稀音家六勝郎

囃子 笛 望月長一郎
小鼓 望月左之助
大鞁 梅屋右近
太鼓 望月吉四郎

陰囃子 望月彦四郎
同 六合新右衛門

# 歌詞と解説（演奏順）

## 第一部

### 一、一中節 三番叟

河竹黙阿弥作詞、初世都一広作曲。明治十九年開曲。昭和三十四年に二世都一広補作。

一中節というのは、元禄のころ京都で生れた浄るりで、邦楽の中では古いものです。それがやがて江戸に移され、現在では、都、菅野、宇治の三派があります。一中節は邦楽の古典といわれ、格調の高さを誇っております。

能の「翁」が音曲に入ってからは、儀式の場合にのみ翁が尊重され、旋律の面白さはむしろ三番叟に集められました。したがって、この三番叟も、古曲としての一中節の、旋律を楽しむように作られたもので、この演奏会の幕開きにふさわしく、荘重にして華麗な演奏をおきかせいたします。

へとう〳〵たらり、たらりら、へたらりあがり、ららりどう、へ所千代までおわしませ、われらも千秋さむらおう、鶴と亀との齢にて、さいわい心にまかせたり。へ鳴るは滝の水、鳴るは滝の水、日は照るとも、絶えずとうたり、ありゆうどう。絶えずとうたり、久方の、天津乙女の舞の袖、かざす千歳の松と竹、世々はふれども色変えぬ、深き妹背の語らいは、天の浮橋二神の、教えを伝う秋津国。

三下りへ千早振る神のひこさの昔より、久しかれとぞ君が代を、寿ぎ祝う白菊の花の名に呼ぶ翁草、一さし舞おう萬歳楽。へおおさえおおさえ喜びありや、喜びありや、わがこの所より他へはやらじと思う。へああらめでたや年立ちて、春の朝のうららかに、霞棚引く空に舞う、芦辺の田鶴の羽をのして、友呼び交す啼く音さえ、二上りへゆたかに住むや住の江の、へ磯馴れの松へ打ち寄する、波の鼓の拍子に連れて、櫓櫂を立てて。国の宝のたなつもの、へ君へ貢の百千船、静けき御代に風立たで、四つの海原おだやかに、東の都賑わしく、千秋萬歳萬々歳と、祝い奏でて舞い納む。

### 二、箏曲 千鳥之曲

この曲は「六段」と並んで箏の代表曲となっている有名曲ですが、「六段」ほどの古曲ではなく、安政二年（一八五五）名古屋の吉沢検校作ですから、およそ百二十年ほど前の作品です。それが明治の中葉から流行したのは、日本海海戦で、八代大将（当時海軍大佐）が艦上で、尺八でこの「千鳥」を吹いたことが評判になってからの事です。現在では、その手法がきれいで、調子に変った妙味があるからですが、誰にでも好まれる大衆性があるからです。調子に雅楽調を加え、歌詞は「古今集」から抜萃した千鳥の歌。前唄から手事（間奏二段）あって後唄、それに百人一首で名高い淡路島の千鳥があらわれますが、その前の浪の音、千鳥の声、磯馴松の響き、風の音などを象徴した十三絃音の美しい緩り、美音妙調が歯切れよく人の胸をつく。調子に一新機軸を開いて新らしい手があります。弾き手にも誰にも好かれているのがこの曲の特長といえましょう。古くて新らしい曲調なのです。

前弾シテへ塩の山、ツレさし出の磯に住む千鳥、君が御代をば八千代とぞ鳴く、君が御代をば八千代とぞ啼く　手事　淡路島通う千鳥のなく声に、いく夜ねざめぬ須磨の関守、幾夜寝覚めぬすまのせきもり。

### 三、清元 梅柳中宵月（十六夜）

河竹黙阿弥作詞、清元お葉作曲。安政六年（一八五九）三月江戸市村座で初演。黙阿弥の書いた歌舞伎「小袖曽我薊色縫」の序幕に用いたもの。

二十五歳になる鎌倉極楽寺の所化清心は、頼朝から同寺に寄進された祠堂金三千両を盗んだ疑いをかけられ、牢に入れられる。覚えのないいいわけは立ったが、遊女十六夜となじんだ女犯の罪に問われ、由比ケ浜で追放に処せられる。そこへ廓を抜けてきた十六夜が来合せ、稲瀬川に投身する。この二人の道行に用いられた浄るりで、清元の傑作として知られている。いかにも江戸時代の清元らしい清元で、幕末の頽廃気分をまじえた色気がこぼれるような曲である。

へ朧夜に、星の影さえ二つ三つ、四つか五つか鐘の音も、もしやわが身の追手かと、胸に時うつ思いにて、廓をぬけし十六夜が、へ落ちて行方も白魚の、船のかがりに網よりも、人目いとうて後先に、心おく霜川端を、風に追われて来りける。詞へ嬉しや今の人声は、追手ではなかつたそうな、廓をぬけてよう〳〵と、ここまで来たことは来たれども、行く先知れぬ夜の道、どこをあてどに行こうぞいの。へしばしたたずむ上手より、梅見帰りの船の唄。へ忍ぶなら〳〵闇の夜はおかしやんせ、月に雲のさわりなく、辛気待宵十六夜の、うちの首尾はエエよいとの〳〵、へきく辻占にいそ〳〵と、雲脚早き雨空も、思いがけなく吹き晴れて、見交す月の顔と顔。詞へヤ十六夜ではないか。詞へ清心さまか、逢いたかつたわいなア。へすがる袂もほころびて、色香こぼるる梅の花、さすがこなたも憎からで、詞へ見ればそなたはただ一人、廓をぬけてどこへ行くのじや。詞へどこへ行くとは胴慾な、今日御追放ときいた故、ひよつとこれぎり逢われまいかと、思えば人のいう事も、心にかかる辻占に、人目を忍んできた私、いづれへなりと共々に、連れてのいて下さんせ。詞へその志はかたじけないが、ふとした心の迷いより、御恩をうけし師の坊の、お名を汚せしもつたいなさ、へただ何事もこれまでは、夢と思いて清心は、今本心にたちかえり、へ京へ上つて修行なし、出家得脱する心、そなたは廓へたち帰り、よい客あらば身をまかせ、親へ孝行つくしやいのう。詞へそりや情ない清心さま。クドキへ今さらいうも愚痴ながら、悟る御身に迷いしは、蓮の浮気やちよつと惚れ、浮いた心じやござんせぬ、へ弥陀を誓いにあの世まで、かけて嬉しき袈裟衣、結びし縁の珠数の緒を、へたま〳〵逢うに切れよとは、仏姿にありながら、へお前は鬼か清心さま、きこえぬわいのととりすがり、恨み嘆くぞまことなる。詞へそういやるのは嬉しいが、見るかげもない所化あがり、わしに心中立てずとも、思いきるのがそなたのため、詞へそんならどうでも私をば、連れてのいては下さんせぬか。詞へさあ悪い事はいわぬ程に、早う廓へ帰りやいの。詞へそのお言葉が冥土の土産、へ岸よりのぞく青柳の、枝もしだれて川の面、水に入りなん風情なり。詞へ南無阿弥陀仏、へすでにこうよと見えければ、清心あわて抱きとめ、詞へアアこれ待つた、早まるな。詞へイエ〳〵放して殺して下さんせ、所詮長らえ居られぬわけ故、詞へなに、長らえていられぬとは、詞へ勤めする身に恥かしい、私やお前の、詞へエエそんならもしや愚僧が胤を、詞へアイナア。詞へこのまま別れて行く時は、腹の子までも闇から闇、とあつて一緒にともなわば、詞廓をぬけしそなた故、捕らえられなばかどわかし。詞へ再び縄目に逢わんより、いつそこの場でとも〴〵に、詞へそんなら死んで下さんすか。詞へほかに思案はないわいの。クドキへほんに思えば十六夜は、名よりも年は三つまし、丁度十九の厄年に、へわが身も同じ二十五の、この暁が別れとは、花を見捨てて帰る雁、へそれは常夜の北の国、これは浄土の西の国、顔むは弥陀の御誓い、へなんまいだ〳〵、なんまいだ、へこれがこの世の別れかと、互いに抱き月影も、またもや曇る雨もよい、詞へこの世で添われぬ二人が悪縁、へ死のうと覚悟きわめし上は、詞へ少しも早う、詞へ南無阿弥陀仏、へ西へ向いて合す手も、凍る夜寒の川淀へ、ざんぶと入るや水鳥の、浮名を跡に残しける。

### 四、義太夫 壇浦兜軍記 阿古屋琴責の段

文耕堂、長谷川千四合作。享保十七年（一七三二）九月大阪竹本座初演。

五段もので大へんに長い複雑な筋の物語りだが、今日演奏されるのは、第三段の口、この琴責の段だけである。

内容は、平家滅亡後も源頼朝を討たんとして活躍する平家の武将景清が主人公。しかしこの段では、景清の愛人阿古屋が捕えられたところからはじまる。岩永左衛門は、阿古屋を拷問して、景清の居所をさぐろうとするが、畠山重忠は、琴、三味線、胡弓を演奏させ、その音色が乱れていないのは、偽りでないと論証して許すという筋。

もちろん、歌舞伎で上演されるのも、この義太夫から脚色

したものである。

へ鴨の脛短かしといえども、是を継がば憂いなん。鶴の脛長しといえども、是を断たば悲しみなん。民を制することこの理にひとし。されば治まる九重に、なおも非常をいましめの、水上清き堀河御所、当時鎌倉の厳命に従い、秩父の庄司次郎重忠、禁裏守護の代官として、かねては民の公事裁判、私のはからいなく、道にくもらぬ十寸鏡、智仁の勇士と輝けり、同席に相並ぶ岩永左衛門致連、南都東大寺の建立より、すぐさま都におしとどまり、重忠の助役と号し、悪七兵衛景清が、ありかを探す邪智佞奸、表は忠義にみせかけて、己が遺恨をさしはさむ、心の底の二股竹、虎の威を借る狐とは、きよろつく顔にあらわれたり。

へかかる折から、秩父の郎等榛沢六郎成清、遊女阿古屋を、拷問の時刻も限る未の刻、六波羅よりたち帰り、御門におろす囚人駕籠、簾をあげて引出だす。姿は伊達のうちかけや、いましめの縄ひきかえて、縫の模様の糸結び、小褄とる手もままなれど、胸はほどけぬ思いの色、形は派手に気はしおれ、筒に活けたる牡丹花の、水あげかねる風情なり。榛沢六郎御前に出、「仰せにまかせ縄をゆるし、さまざまなだめ不便を加え、尋ね問い候えども、何分景清が行方存ぜぬとばかり、外に出す口も是なき故、召しつれて候。と、披露なかばに岩永左衛門。「ヤア不念なり榛沢、科人に縄もかけず、その上見れば、拷問に疲れたる景色も見えぬが、エエきこえた、さては御辺が今日の拷問、なまぬるくやられしな、よいよい、明日は拙者がうけとり、そう〳〵家来まかせにもなるまじ、自身の手並をつけ、景清がありか、ほざかして見しよう。侍どもやい、あの女め、岩永が屋敷へ引け、と、例の粗忽を重忠おしとめ、いやまずまたれよ岩永。「縄をゆるし、拷問をゆるめしも、榛沢が私ならず、それがしが了簡、その上に今日の暮まではこの方の計らい、そこもとのおかまい無いはず、いらぬ世話御無用〳〵。こりややい阿古屋、今日もまだ白状せぬよし、はてさてしぶとい、なぜいわぬ。さりながら、それもなア無理とは思わぬ、義理と情を表に立るが遊君の慣い、いかに責めらるるが辛いとて、馴染を重ねた夫の行方、ついおうとも明かされまいさ。さなきだに流れを立る女は、誠なき者と一むきに心得しやからもあれば、それらがそしりもうたてく思い、または同じうきふしを勤める、友朋輩の顔汚しなどと思うての事ならんが、ここをとくと合点せよ。景清が行方、存ずべき者なればこそ、搦めて取つて詮議もする。ありように白状すれば、かたじけなくも鎌倉殿の御意を安んじ奉り、あつぱれの御奉公、萬人のそしりをうけても、君一人の心に叶わば、その身の冥加悪しからまじ。ここをよくわきまえて、サアさつぱりと景清がありか、この重忠にきかせい。と、ものやわらかに理をせめて、しかもこたゆる詮議のことば。阿古屋はきいて、さつてもきびしい殿様。「四相を悟るお方とは、常々噂にきいたれど、何の仔細らしい、四相の五相の、小袖にとめる伽羅じやまでと、仇口にいいながせしが、今日の仰せに我が折れた。勤めの身の心をくんで、かたじけない仰しやりよう、なん〳〵の誓文で、景清の行方知つてさえいるなら、お心にほだされ、ついぽんというてのけようが、何をいつても知らぬが真実、それとても疑いはれずば、ハテいつまでも責めりようわいな。責めらるるが勤めのかわり、お前方もせいだして、お責めなさるが身のお勤め。勤めという字に二つはない。アア浮世ではあるぞいな。というにそばからこらえぬ岩永、ヤアべり〳〵とはつしやいだ頤骨。ぜひ白状をせぬにおいては、この間の拷問に品をかえて憂目を見する。きけば汝は懐胎とな。よい〳〵きつと思いついた。腹の子のあるかざみの格、塩煎責めにしてくりよう、とおどしをかくれば、ハ、、、、そんな事こわがつて、苦界が片時なろうかいな。同じ様に座に並んで、殿様顔してござれども、意気かたは雪と墨。重忠様の計らいとて、榛沢様の今日の詮議。縄もかけず責めもなく、六波羅の松かげにて、物ひそやかに義理づくめ、さまざまといたわりて、サア景清が行方はと、問われし時のその苦しさ。水責め火責めはこたえようが、情と義理とにひしがれては、この骨骨も砕くる思い。それほどせつないことながら、知らぬ事は是非もなし。この上のお情には、いつそ殺して下さんせ。と、とんと投げ出す身の覚悟、もてあましてぞ見えにける。重忠、榛沢を近く召され、「かほど心をつくせども、まことを明かさぬ上からは、目通りで拷問せん。それ〳〵と、仰せあることばの尾に付け岩永左衛門。「ヤア〳〵ものども、阿古屋に水くらわす用意〳〵。と呼ばるにぞ、あつと答えて白洲の内、直す様子を見るにさえ、心は上る枕の横槌、底のかたえの井戸屋形、深くもきしる絞車の、胸に響きて気をひやす、阿古屋が心の濁り水、今しも呑むやと覚悟のてい。重忠庭に下り立つて、「アア仰々し、静まれ〳〵。阿古屋を拷問の責道具は、それがしかねてこしらえおきたり。誰かある。持参せよと、仰せにしたがい持ち出るは、いともやさしき玉琴に、三味線胡弓とりそえて、音締めもさぞと白洲なる、阿古屋が前に並べ置く。「こりや何じや、興がるは、責道具〳〵と、何ぞきびしいことかと思えば。エエきこえた、拷問にことよせ、自分の慰み気晴らしをやらるるな、天下の政道をとりさばく決断所での琴三味



線、神武この方無い図なおたえ、実にまこと世界のありさま、天に口なし、人をもつていわしむるとは今思い当つた。阿古屋めが懐胎、もしもやこの子が女の子なら、琴でやがん〳〵、三味線でなんとやらと、京中がうたいしはこの前表、この上のやぶれついで、ちよちよげなんどもよござんしよがの、ハ、、、、と嘲弄す。重忠耳にも入れ給わず、「ヤレ阿古屋なぜ始めぬ、琴をひかねば景清がありかをいい明かす所存か、とことばもしげき重忠の、底の心はしらねども、是非なく向かうつま琴の、行方を何といわこすに、糸も心も乱るるばかり、声も枯野の船ならで、かいなき調べかきならし、「影というも月のえん、清しというも月の縁かげ、きよき、名のみにてうつせど、袖に宿らず。重忠耳をそばだて給い、今弾ぜしは、蕗組の唱歌をわが身の上にとり、景清が行方知らぬとな、まあ知らずんば知らぬにせよ、この上は三味弾けい、エエイ、いやさこつちの尋ぬる仔細を、きかぬうちはいつまでも、と猶望まるる三味線の、どうなることか知らねども、思いこんだる操の糸、今さら何とたがやさん、心の天柱ひきしめて、「翠帳紅閨に、枕並ぶる床の内、なれし襖の夜すがらも、四つ門のあと夢もなし。さるにてもわがつまの、秋より先に必ずと、あだしことばの人心。そちの空よとながむれど、それぞと問いし人もなし。オウもういい三味線やめい。班女が閨のかこちぐさ、絶えし契りの一節、時にとつての一興ながら、いいわけはくらいくらい、西海の合戦に命を逃れ、都におり〳〵まぎれ入る景清、そちは度度逢おうがな。この通りではすまされぬ、それ胡弓すれ〳〵。あいと答えて気は張り弓、歌は哀れをもよおせる、時の調子も相の山。「吉野竜田の花紅葉、更科越路の月雪も、夢とさめては跡もなし、あだし野の露鳥辺野の、烟は絶ゆる時しなき、これが浮世のまことなる。まことをあらわす一曲に、重忠ほとんど感にたえ、阿古屋が拷問ただ今限り、景清が行方知らぬというに、いつわりなきこと見届けたり、この上には構いなし。「岩永は拍子もなく、調子にのらぬ三味線の、天柱変えたる蕗組も、冥加にあまる御情け、つど〳〵お礼ものべざおに、長居は恐れこのままに、すぐに御前を三下り、秩父は正しき本調子、ばち利生ある糸さばき、すぐなる道こそありがたき。

## 五、長唄　鷺娘

宝暦十二年（一七六二）四月、江戸市村座初演。本名題は「柳雛諸鳥囀」といい、このほか「後面」「傾城」「布袋」の三つが組み合わさった四変化舞踊の一つであった。なおこのときはじめて廻り道具を用いたという。

壕越二三治作詞、富士田吉次、杵屋忠次郎作曲で、江戸長唄初期の作品だけに、全曲を三下りで通した古風幽艶な曲である。

内容は、雪の降りしきる水辺にたたずんでいる白鷺の姿をかりて、恋に悩む若い女性を象徴して描いたもの。

はじめは雪中に悄然と迷いたたずむ様子、次に幽艶なクドキ、はなやかな傘踊、最後は地獄の苦しみという順序。とくに前半の雰囲気描写は、古曲中の傑作といわれております。

三下りへ妄執の雲晴れやらぬ朧夜の、恋に迷いし我が心、へ忍山、口舌の種の恋風が、へ吹けども傘に雪もつて、積もる思いは泡雪の、消えてはかなき恋路とや、へ思い重なる胸の閘、せめて哀れと夕暮に、ちら〳〵雪に濡れ鷺の、しよんぼりと可愛らし。へ迷う心の細流れ、ちよろ〳〵水の一筋に、へ怨みのほかは白鷺の、水に馴れたる足どりも、濡れて雫と消ゆるもの、へわれは涙に乾く間も、袖干しあえぬ月影に、忍ぶその夜の話を捨てて、クドキへ縁を結ぶの神さんに、取り上げられし嬉しさも、余る色香の恥かしや、へ須磨の浦辺で潮汲むよりも、君の心が汲みにくい、さりとは、実に誠と思わんせ。へ繻子の袴の裝とるよりも、主の心が取りにくい、さりとは、実に誠と思わんせ、しやほんにえ。へ白鷺の、羽風に雪の散りて、花の散りしくへ景色と見れど、あたら眺めの雪ぞ散りなん、雪ぞ散りなん、へ憎からぬ、へ恋に心も移ろいし、花の吹雪の散りかかり、払うも惜しき袖笠や、へ傘をやへ傘をさすならば、てんてんてん〳〵日照傘、へそれえ〳〵さしかけて、いざさらば、花見にごんせ吉野山、へそれえ〳〵、匂い桜の花笠、へ縁と月日を廻りくるくるへ車笠、それ〳〵それそうじやえ、へそれが浮名の端となる、へ添うも添われずあまつさえ、邪慳の刃に先立ちて、この世からさえ剣の山、へ一じゆのうちに恐ろしや、地獄のありさまことごとく、罪を糺して閻王の、鉄杖まさにあり〳〵と、等活畜生、衆生地獄、あるいは叫喚大叫喚、修羅の太鼓は隙もなく、へ獄卒四方に群がりて、鉄杖振りあげくろがねの、牙噛みならしぼつ立て〳〵、へ二六時中がその間、くるり〳〵、

追い廻り〳〵、ついにこの身はひし〳〵〳〵、憐れみ給えわが憂き身、語るも涙なりけらし。

## 六、常磐津 神路山色琫（かみじやまうきなのこいぐち）（油屋縁切）

安政二年（一八五五）五月、江戸の中村座と市村座で、二番目狂言として同時に「伊勢音頭恋寝刃」が上演されることになった。市村座では従来の竹本の浄るりでは面白くないというので、目先をかえて、常磐津節に直して上演したところ、坂東彦三郎の福岡貢、尾上菊次郎のお紺、中村鶴蔵の万野という配役とも相まって非常な好評を博した。

もちろん、瀬川如皐が修正改作し、当時の名人といわれた常磐津豊後大掾と岸沢古式部が力を合せて節をつけたものである。

今回演奏する場面は、貢とお紺とが、図らず阿波の大尽の酒席で落ち合ったところからはじまります。お紺は、万座の手前、わざとお鹿との間を疑い、心にもない愛想づかしをいって、貢をののしります。その本心を知らない貢は、烈火のように怒り、殺してやろうと立去るところまで。

へ人や知らじと思えども、始終の体を立聴く喜介、へこの様な事もあろうかと、蔭ながら気をつける己れが目を抜き、アノ下坂をしてやろうとは、へ、ハ、、、、、滅多にその手で行くものかえ。この喜介の料理あんばい、仕上げを見せてへくれようと、胸におさめて入りにける。へ辛い勤めも取り分て、辛気々々の無理酒を、過す心の乱れ足。へ岩治さんは何処にじやえ。へオオ此処にいると立ち出づる顔うちまもり、へ何をそわ〳〵してござんすえ。へなんの身共がそわつくものか。へデモわたし一人、座敷へ置いて何をしてござんしたえ。へエ。へこの間から免やこうといわんした。アリヤ嘘でござんすか。へなんの〳〵。なぶるなどとは勿体ない。ぞつこん首丈惚れ込んだこの岩治、お伊勢御を誓いに立て、中々以て嘘じやないわいやい。へそれが正なら嬉しいと、膝にもたるる酒の科。徳島はぐにや〳〵〳〵と、猫にまたたび振りかけた。へようまア得心してくれたな。イヤ併し大分酒に酔うた様子、醒めての上のご分別、手打つて替わろう手管か知れぬ。こりや嘘らしいと裏問えば、奥より万野立出でて、へ何の嘘いうてよいものか。へ証拠人は北六万野、用意がよくばはやこれえの、へことばに仲居末社共、へ千しん万くんの思いを晴らさせ奉る、へサア御祝言目出たいと、雌蝶雄蝶に盃を、今宵ぞ寿留めよろ昆布、へサア〳〵、申しお紺さん、岩治さんと固めの盃、色直しは直ぐに床入り、へ媒人役は北六様、へ嫁君から飲んで花聟へさし玉へ。へ万野が立つて盃を、お紺にサアと差しつけるを、へ立てし起請の手前さえ、取り上げ兼るを心に詫び、思い切つて手に持てば、万野がなみ〳〵つぐ酒に、窺う貢が走せ寄つて、お紺が盃引ったくり、へイヤお紺、おのれこの盃しちや済むまいがやと、落花微塵になげうつたり。あわやと満座も見合す顔、お紺はにつこり、へホ、、、誰かと思えば貢さん、お客と盃するが、マ、なぜに済まぬえ。へオオ一ト通りの盃なら格別、その客と一生の固め祝言のと、改まつたこの場の盃、それ故さすことならぬ、と詰め寄つて、へコリヤお紺、我身それじや済むまいがな。これ迄長の年月を、言いかわしたこと頼んだこと忘れしものか、おのれはなア、もう料簡がと立ちかかるを、へ岩治が引き退け尖り声、へヤイヤイ〳〵、身が揚詰の女郎へ対し、無礼な奴、うぬどうしてくれんと立ちかかるを、へアアコレ、マアマア待つてと万野が押し止め、へこれいなア貢さん、お前はマアこちの内へ、誰が許してござんしたえ。へヤア誰がとは最前おぬしに。へエエモ、じやら〳〵と何をいうてじやいな。わしや知らぬぞえ〳〵。お前の様な油虫客は、顔を見るも胸が悪い。ハイ、縁起が悪い。ちやつとお帰り。これいなア貢さん、去んで貰いましよと、いえば猶更ぐつと急き立ち、へコレ万野、マア味なこといいおるな。この貢がいつ女郎の油吸うたことがある。サ、、それ聞こう。へオホ、、、、アノマア白々しい顔わいな。ヤコレお紺さん。最前の文出して見せてやらんせと、いうにお紺が顔背け、投げ出す文をそのまま取つて読み取る文言。へムムコリヤコレおれが名を騙り、女郎のお鹿へ無心の状。へ何と覚があろうがの。へイヤ知らぬ。コリヤ偽せ筆。コレコレ、よう物をつもつて見やいの。あた薄汚いアノお鹿、なりといい顔といい、悉皆猿芝居のお染のような、あきれてものがいわれぬと、いうを聞きつけ走せ出るお鹿、貢が前へどつかりと、大臼なり、へ申し貢さん。さつきにからこの満座の中で、私の悪口よういうて下さんした。それ程厭なら何故この中から、万野を頼んで、コレ〳〵この様な度々の無心状、へ金より大事な貢さん、へ初めはわづか二分三分、へ貸して上げたもこなさんに、惚れた私の心から、鰻登りにのぼりつめ、コレ、ここに三両、かしこに五両、その度毎に身の廻り、並大抵の事かいなア。梅が枝もどきでいるものを、みんな狸の嘘の皮、へお猿芝居のお染とは、へあんまりつれない、エエ私しや立たぬ。コレ立ててたべ。のほよほよほよほさんな又立うかいな。と武者振りつくを突きのめし。へエエ、まざまざしいその嘘言、身不肖なれども福岡貢、女郎を欺して金取ろうか。エエ馬鹿なことをと睨みつけ、へコレお紺、このお鹿を呼んだのは、この間から頼み置く、ナソレ、あの事でそなたに一寸逢いたさに、待ち合わせる中、酒の相手に、誰なと呼ばにや座敷に置かぬと、万野がいう故誰なりとと、いえば図らずこのお鹿、拵え文の様子といい、コリヤ深い仔細が無けりやかなわぬ。訳はどうじやと詰め寄れば、お紺はじろりと打見やり、へオホ、、、お前からおこさんした内証の文が私の手に入り、腹が立つのも尤もでござんす。コレ申し貢さん、へ今更いうも愚痴ながら、広い伊勢路のこの廓で、今日の今迄浮名立つ、二人が深い恋仲に、へこうした訳で金が要ると、明していうて下さんしたら、何ばかいしよない私でも、三十や五十の金、万更いやともいうまいに、その私を差し置いて、さもしい僅なアノ金に、こんな多くの人中で、恥かかしようと見す〳〵知れた。へエエ。へイイエナア、へ拵え事じやどうこうと、ほんのこの座のてれかくし、見下げ果てた貢さん、恋も色もさめ果てた。それじやによつて私しやモウ、ふつつりと思い切り、岩治さんに靡く心でござんす。マア、そう思うて下さんせと、剣もほろろにいい放す。へ貢は躍起と、へこりヤヤイお紺、おのりや、アノ気が違いはせぬかよ。エエコレそんな約束じやあるまいがな。流の身にも誠ある、女子と思いうか〳〵と、親の諌めや世の義理も、忘れて深く馴れなじみ、起請誓紙のその上にも一大事、イヤサ、大切の事までも打明し、頼んだが口惜しい。已れは根性が腐つたか。イヤサアノ根性が。へサ、、、その根性が腐りました。アアノ気も違うた。気も違わいでこんなこと、サ、その私えの未練を残さずに、きりきり去んで下さんせと、へ口と心の裏表、色にも出されぬこの場の仕儀、血を吐く思いぞ切なけれ。へ知らぬ貢は腹立涙、拳を握る男泣。へ傍から北六高笑い、へアハ、、、、アハ、、、色色と珍らしいことを聞くものだ。へ客が女郎を欺して取るとは、へ世にも珍らしい新板だわえ。へこれが真の伊勢乞食だ。へ御導者々々。徳島旦那はお大尽、かす爾宜貢は油虫、サツサツト掃アき出せ〳〵。へ何だ何だ〳〵、何んで睨みさらすのじや。エエいけどう乞食の生盗人め。といえば岩治もせせら笑い、へムム聞けば聞く程たわけの限り。お紺が心底聞く上ほ、今夜中に身請して己が女房、ドレ金の威光を見せてくれようと、へお紺が膝を仮枕、脛ふん伸ばして、ムム、傍若無人、貢は歯噛み足摺りして、へチエエ、アノざまは。見下げ果てた畜生め。とはいえおのれに限って、この様な根生とは知らなんだわえ。へお紺が胸はなお百倍、張り裂くばかりせぐるしさ。涙紛らす煙草さえ、へのれんの蔭に立聴く喜介、刀を持つて走り出で、へ貢様、モウお帰りなされますか。お預り申したお腰の物と、差出す刀引たくり、腰にさす間も気は転倒、刀の違い気も付かず。へ万野は傍え立ち寄つて、へこれナア貢さん、もうおしやべり仕舞かえ。もつと何ぞいわんせんか。何ぼやき〳〵思わんしても、銭の切れ目が縁の切れ目じや。お紺さんを恨みなさることは微塵もない。お前の素寒貧を恨まんせ。ほんにほんに、お前の様は貧乏神は、片時置くも内の不吉、とつとと去んで下さんせと、突き出す門口堪え兼ねて、刀の柄え手をかくるを、へアコレと、喜介は止める気扱い。へ貢も大事を抱えし身。へお紺が見返り、へこレ貢さん、モウ是きり逢わぬぞえ。へ勝手にしをれと閉て切る門の戸、へ無念涙に心も空、へお紺覚えていいよ。へ道を蹴立てて走せ返る。へ後は座敷も浮き立ちて、へサア〳〵油虫客の幕が切れたわいナ。嬉しや〳〵。へこれから後の色直しは、お床入の玉子酒、へさアござんせと打連てこそへ入りにける。

## 七、箏曲 岡康砧（おかやすぎぬた）

この曲は山田曲ですが、風変りなもので、というのも長唄の人の作曲だからでしようか。山田曲はすべて箏ものの作曲ですが、この曲は三味線の手つけで、それが藤植流の胡弓に残っていました。それを、藤植流の家元だった山室保嘉が、二代目山勢松韻と相談して山田流箏曲に移して世に出したものです。

原作は岡安小三郎となっており、岡安が岡康となったのは徳川家康が岡崎にいた時、つれづれの折にこれをきいて感動し、康の字に変えよといったからとの事。真偽は不明ですがそういう伝説があります。砧の曲としては、山田流では手事風のところもあり、珍らしいものとして流行し、会などにはよく出されております。

シテ へ月の前の砧は ツレ 夜さむを告ぐる、雲井の雁は琴柱にうつして面白や、手事 へ夜半の砧のしぐれの雨と、うちつれたちて、今日の遊びは

# 第二部

## 一、河東節　橋弁慶

武蔵坊弁慶が五条橋で牛若丸にあい、互いに秘術をつくして戦った末、その家来になるという話は、童謡にもうたわれるほど有名である。この出典は「義経記」の巻三で、それを脚色した謡曲「橋弁慶」は、のち邦楽の同名の曲のもととなった。

この河東節の「橋弁慶」もそのうちの一つで、能楽の筋をかりて、文政末ごろ三代目山彦文次郎が作曲したもの。江戸純粋の浄るりである河東節が、その特徴を十分にいかして、この勇壮で変化に富んだ物語りを、いかにあらわしたか、そこらがききどころである。

〽是は西塔のかたわらに住む武蔵坊弁慶にて候。われ宿願の子細あつて、五条の天神へ丑の刻詣でを仕り候。今日満願にて候程に、兄今参りばやと思い候。如何に誰かある。〽御前に候。〽五条の天神へ参ろうずるにてあるぞ。その分心得候え。〽かしこまつて候、また申すべき事の候。昨日五条の橋を通り候ところに、十二三なる幼き者、小太刀にて切つてまわり候。さながら蝶鳥のごとくなる由申し候。まず〳〵今夜の御物詣では思召し御とまり候え。〽言語同断の事を申し候。たとえ天魔鬼神なりとも、大勢にはかなうまじ、追つ取りこめて討たざらん。〽追つ取りこむれば不思議にはづれ、敵を手元へ寄せつけず、〽手近く寄れば、〽目にも〽見えず、〽神変奇特不思議なる化生の者に寄合せ、かしこう御身討たすらん、都広しといえども、是ほどのものあらじ、実に奇特なる者かな。〽さあらば今夜は思い止ろうずるにてあるぞ、さりながら弁慶ほどの者の聞き逃げは無念に候間、今夜夜ふけば橋に行き、化生の者を平らげんと、〽夕べほどなく暮れ方の、雲の景色を引きかえて、音も静かにふくる夜を、遅しとこそは〽待ちいたれ、〽遅しとこそは待ち居たれ。〽さても牛若は、母の仰せの重ければ、明けなば寺へのぼるべし、今宵ばかりの名残なれば、五条の橋に立ち出でて、川浪添えてたちまちに、月の光を眺めんと、〽夕浪の景色はそれか夜嵐の、夕べほどなく秋の風、面白の景色やな、そぞろ浮き立つわが心、浪も玉散る白露の、夕顔の花の色、五条の橋の橋板を、とどろ〳〵と踏み鳴らし、風すさまじくふくる夜に、通る人をぞ待ちいたる。〽すでにこの夜も明方の、山塔の鐘も杉間の雲の、光り輝く月の夜に、着たる鎧は黒革の、縅しに縅せる大鎧、草摺長にざつくと着、もとより好む大長刀、真中取つて打ちかつぎ、ゆらりゆらりと出でたるありさま、いかなる天魔鬼神なりとも、面を向くべきようあらじと、わが身ながらも、もの頼母しうて手にたつ敵の恋しさよ。〽川風もはや吹き過る橋の面に、通る人もなきぞとて、心すごげに休らえば、〽弁慶かくとも白浪の、たちより渡る橋板を、さも荒らかに踏みならせば、〽牛若彼を見るよりも、すわや嬉しや人来ると、薄衣なおも引かつぎ、かたわらに寄りそいたたずめば、〽弁慶彼を見つけつつ、言葉をかけんと思えども、見れば女の姿なり、われは出家の事なれば、思いわずらい過ぎゆけば、〽牛若彼をなぶつてみんと、行き違いざまに長刀の柄元をはつしと蹴上ぐれば、〽すわしれ者よ、ものみせんと、長刀やがて取り直し、いでものみせん手並の程と切つてかかれば、〽牛若は少しも騒がず、つつ立ち直つて薄衣引きのけつつ、しずしずと太刀抜き放ててつつ支えたる長刀の切先に太刀打ち合せ、ためつ〽ひらいつ〽戦いしが、何とかしたりけん、〽手許に牛若寄るぞと見えしが、たたみ重ねて打つ太刀に、〽さしもの弁慶あわせかね、橋桁を二三間しさつて胆をぞ消したりける。あらものものし、あれほどの小姓一人を切ればとて、手並にいかでもらすべきと、長刀柄長くおつ取りのべて、走りかかつて丁と切れば、〽そむけて右に飛び違う、〽取直して裾をなぎ払えば、〽躍り上つて足もためず、〽宙を払えば、〽首を地に着け、〽千々に戦う大長刀、打ち落されて力なく、組まんとすれば、〽切り払う、〽すがらんとするに便りなし、せんかたなくて弁慶は、希代なる少人かなとて、あきれはててぞ立つたりける。不思議や御身誰なれば、まだいとけなき少人の、かほどけなげにましますぞ、くわしく名乗りおわしませ。〽今は何をか包むべき、われは源牛若、〽義朝の御子か、〽さて汝は、〽西塔の武蔵弁慶なりと、〽互いに名乗り合い、〽降参申さん御免あれ、少人の御事われは出家、位も氏もけなげさも、よき主なれば頼むなり、そこつにやおぼし召すらんさりながら、これまた三世の、〽奇縁のはじめ、今より後は主従ぞと、契約かたく申しつつ、薄衣かづかせ奉り、〽弁慶も長刀打かついで、九条の〽御所へぞ参りける。



## 二、義太夫　長局の段

加賀見山旧錦絵

容楊黛作、天明二年（一七八二）一月江戸外記座初演。実説と加賀騒動を組み合せて作った十一段という長い筋の物語り。

管領足利持氏の臣大杉源蔵は、お家横領を企て、忠臣紙崎主膳の弟畑介をそそのかし、相模川で持氏を討ちとらせる。源蔵の一味である局の岩藤は、密書を中老の尾上に拾われたため、これをおとし入れようと計画、鶴ケ岡代参のおり、尾上を草履で打つ。尾上は主家のため、その場はたえて部屋へ帰る。

ここから今日演奏される場面になる。そしてこのあと、お初は奥殿にかけつけて岩藤を討って主人の恨みをはらし、その功により二代目尾上に出世する。

歌舞伎の弥生（三月）狂言としてよく上演されるのも、この義太夫をもとにしたもので、今回はそのもととなった義太夫をゆっくりと味わっていただきたい。

なお、義太夫も尾上と岩藤のくだりのみが残って今日に伝わり、他の段は廃滅した。

〽あとに尾上は胸せまり、忍び涙の渕も瀬も、明日は亡き名を白紙に、硯の海のそこはかと、なきながら文もあとやさき、かきおく筆の命毛も、露と消えゆくはかなさを、絶え入るばかり忍び泣き、涙とともに書きとどめ、革の文箱も浦島が明けてくやしき意恨の草履、文もろともに文箱の、紐ひきしめてかたえなる、手箱のうちをかたみわけ、数も涙の玉櫛笥、こま〳〵しくも小文庫に、思いつめたる憂き涙、つつむにあまる小風呂敷、中結しめて玉の緒も、今をかぎりの空結いに、封もしどろにかきくれて、思わずわつと泣く声も、袖に包みし思いなり。なに心なく勝手口、お初は心いきせきと、煎じ上げたる薬なべ、片手に茶碗たずさえ出で、サアお薬と差し出し、見れば包と文箱に、きつと目をつけ、初「これはしたり、お心悪いにどこへのお文、お気がつくように何事」と、問いかけられてさあらぬてい、尾「イヤこの文は、母様へ急にあげねばならぬ文、この包たいぎながら、つい行てきてたも」と、物軽にいいつけられてもじもじと、何らやすまぬ今日の次第、不肖〳〵に 初「アノ参れなら参りましようが、アレごらんじませ、空合も曇つてくる、勝手がましゆう思し召しましようが、明日の事になされませぬか」 尾「デモ初としたことが、いかに心やすだてとて、主のいいつける宿への使い、明日の事にでもせいとは、いかに女の主なればとて、主のいいつけをそむきやるか」 初「イエイエ何の御意をそむきましようぞ、御持病のお癪もおこり、お顔持ちも悪い故」 尾「イイヤ癪気はもう直つた、日のたけぬうち早う行きや」 初「ハイ」 尾「早う行きや、何をうじ〳〵するぞいの、行けというに行かぬか」 初「ハイ只今参りますわいの」と、文箱とりあげ次の間の、案じに胸のはりつづら、明けて出したる生木綿の、在所染めなる紋付も、部屋方者の一張羅、帯し直してひとりごと。 初「今日に限つてこのお使い、行きとむ無うて〳〵、尾上様のお身の上が案じられてどうもならぬ、昨日鶴ケ岡の喧嘩の様子、御殿一杯の取沙汰を御存知ないか、私にまでおかくしなさるお心の程が、私はどうも案じらるる。真実庶から大切に思う、お主の大事を虫が知らすとやらいうのか、アア心もとない〳〵、御機嫌に違うても、行たふりして行くまいか、イヤ〳〵、どういう急な御用やらしれぬ事をそうもなるまい、オオこういう時の仏神様、そうじや〳〵」とちり手水、一心無我の手を合せ「南無観音様南無観音様、南無鬼子母神様〳〵、お宿へ参つて帰りますうち、主人の身の上頼み上げます、ドリヤ一走り走つてこうか」と小褄りりしく高からげ、錠口さして出でて行く。影見ゆるまで見送りて、こらえこらえし胸の内、思わずわつと伏し沈み、消え入るばかり歎きしが、よう〳〵に顔をあげ、 尾「まだ昨日今日、なじみもないこの私を大切に、大恩うけた主人じやと、年はも行かぬ心から、大事に思うてくれる志、コリヤかたじけないぞや嬉しいぞよ、岩藤へ意恨を察し、さつきにもよそごとに、浄瑠璃のたとえをひき、私が短気な心も出よかと、いいまわしたるけなげな利発、今別れたが一生の別れとは知らずして、さぞやとつかわ戻つてきて、歎かん事の不便や」と、身を浮くばかりせきあげて、前後不覚に歎きしが、ややあつて顔をあげ、 尾「父様や母様のこの年月の御不便がり、御恩は海もなお浅く、山よりも高き御恵み、片時忘れぬお二人さま、この中のお文にも、母様のこまごまと、『いこうこの頃はおしなべて、ひき風邪の流行り病、一しお案じらるる程に、この守りは萩寺の厄病除けのお守りじや、朋輩衆も多い事、悪い病いの折見舞、うつらぬ程に大事にかけや、またその上に身用心というて外には無い、食物に気をつけて、気うつせぬ様に折節は、酒でも給て気を晴らし、わずらわぬよ

うに、第一は御奉公を大切に、また合い薬の黒丸子、切れた時分と気をつけて、もう三年で御年も明く、御礼奉公早うして下りやるを指折つて待つている』と、小さい子供か何ぞのように、成人のこの私を、大事がつてござるその中へ、あの文を御覧じたら、何と身も世もあらりようぞ。常に気細な母様の、その場ですぐに死なしやんしよ。今死ぬるこの身より、あとの歎きを見るようで、胸もはりさく悲しさは、何の因果の報いにて、親子の縁の薄墨に書きおく筆のさかさまごと、必ず御許し遊ばせ」と、正体涙せぐり上げ、身もうくばかり取り乱す。「アアわれながら未練なり、女ながらも武家奉公、草履をもつて面をうたれ、なに面目に長らえて、人に顔が合わさりよう。とは思えども大切な、御前様への忠義を思い、今までは長らえしが、この書置に委細のわけ、伯父弾正の悪事の密書、命を捨てて上への忠臣、ただ何事も宿世の約束、最後の晴れの支度して、一遍の経陀羅尼、唱えんもの」と一間なる、仏間へさして日も西へ、夕日まばゆき空色も、磨きたてたる練塀作り、足利家の裏門に、文箱抱えて出るお初、なりふり見ずにいきせきと、行き向かうより二人連れ、何かぶつくさ咄し合い、来るもお初が心の辻占、行き違いざま、「叶わぬ〳〵もう叶わぬ、取り返すがまだしもの事、可愛い事をしました」と、きく辻占にお初がはつと、見やる空には一群の、とまり烏のなきつれて、最後を告ぐるたまよばい、心細さも身にしみて、歩みもやらず立ちどまり、　初「アア気にかかる〳〵、辻占の今の話し、烏なきのこの悪さ、アレ〳〵けしからぬ胸騒ぎは、こりやお宿へは行かれぬわいの、様子は知れるこの文箱、封じを切つて見てのきよう」と、思い切つて封おし切り、見れば包みし草履片々、文押しひらき、何じや書置の事、こりや叶わぬと懐へ、一字も読まずいつさんに、御門の内へと、へ入相の、鐘も無常を告げて行く、転んず起きつ廊下口、半狂乱のお初が仰天、部屋の襖も案内なく、一間を見ればこわいかに、血に染まつたる尾上が亡骸、抱き上げてただうろ〳〵、　初「エエしなしたり遅かつた、今一足早くばなあ、この御最期はさせませぬ、コレ申し尾上様、尾上様、旦那様」と、呼べど答えも涙より、外にことばも泣き沈む。　初「喉のくさりを思いのまま、かき切つてござるものを、何の答えがあるものぞ、ナニ、御前様御披露、ムムコリヤさつきにうかがいきいた岩藤が密書、是さえあれば御身の明りはたつ、ありがたい〳〵、コレ申し、御無念の魂はまだ家の棟においでなさりよう。エエきこえませぬわいの〳〵、昨日鶴ケ岡で岩藤づらに、草履をもつてお打たれなされしその取沙汰は屋敷一杯、御家来の私の身で、口惜しゆうあるまいかや、無念にはあるまいかのう、女にこそ生れたれ、私も武士の娘、御鬱憤をはらしかねようか、昨夜一夜まんじりともせず、今日までも思案とりどり、もう打ち明けてお話しなさるか、今打ちあけてお話しかと、見合して見てもお隠しなさるる、エエ不甲斐ないお生れじやと、傍で見る目のはがゆくて、さつきにも浄瑠璃のたとえをひき、お心をひいて見たれば『塩冶判官の短慮なのも、無理とは思わぬもつともじや』と、仰しやつた時のその嬉しさ、そのお心にはりがあらば、あつぱれお手は下さぬと悦びは喜びしが、ひよつと御前様が浄瑠璃の、塩冶判官をなされてはと、わざと御前をおなだめ申し、すきを見合せ岩藤を、一刀に刺し通し、御恩を報じ奉らんと、思うに甲斐も今宵のありさま、御書置のこの表、おつつけ敵岩藤が、首ひつさげて御無念をはらさせましよう、必ずお待ち遊ばせ」と、意恨の草履手に取り上げて、打ち眺め〳〵、無念の涙血をそそぎ、こり固まりし烈女の一念、義女のその名を末の世に、錦と代る麻の衣、女鑑と知られける。

## 三、地唄曲　鼠

地唄の中には作物（さくもの）といって、滑稽な曲、俗におどけ物ともいう道化た曲があります。古くから検校連中がふざけて作った曲として、十数曲が知られております。中でも有名なのが、狸、かわず、鼠などで、この鼠には、荒鼠、曲鼠、鼠の道行、鼠の仇討などがあります。中でも有名なのが、荒鼠と曲鼠、文句は同じですが、それを三絃できかせる曲鼠は、その手法妙調で曲弾きの所もあり、地唄三味線の妙をつくす。それを本手と替手で手をからませて賑やかにきかせます。歌詞も滑稽なふざけたものですが、こうしたおどけ物は、作者の名のりはありません。

〈釈迦に提婆や鯨にしやちほこ、月に村雲花に風、国に盗賊家には鼠、宵は天井がら〳〵と、仲間鼠を呼び集め、角力取るやら踊るやら、ちゆつちゆでせい、五百七十七まがり、猫のねの字もいやで候、先は梁越えたり、中にも古き大将は、天井板の隙間より、下の様子をうかがえば、夜もしん〳〵とふけわたり、人も静まる行燈もしめて、時分なよしとう



ちうなづき、さらばこれから座敷へ下りよう、皆こい〳〵と打ちつれて、柱や障子をごそ〳〵〳〵ごつそり〳〵と、下り揃えば、大将耳をよじ振つて、こりや〳〵手下の鼠共、まず十四五匹は茶の間、料理場、台所、わさびおろしに近寄るな、はしりのもとには水壺あり、縁をつとうてすべるなよ、まだその先きにはき猫たたみうち、ます落し、合点か、必ず必ず忘れても、棚の道具を引きくづし飯焚婆めを起すなよ、さてまた歯ぶしの達者な者共は、箪笥長持かじるべし、尾長の禿はいつもの如く行燈部屋、油徳利に尾を入れて、随分々々油をねぶるべし、廿日鼠は化粧の間、びん台を嚙るべし、我はこれにて休らわんと、違い棚にぞ上りける。（手事）向うにごり〳〵かしこにごと〳〵、がつたりがたり〳〵、思いがけなき二三匹、あわただしく駈け来り、もうし〳〵大将は、大事が起り候や、わたくし共はいつもの如く、肉りんの肴戸棚をかじる内、にわかに台所が大騒動、ちよつと覗いて候えば、赤まだらの大猫が、長尾の首すじ引くわえ、ちゆつと鳴いたが、後はメリ〳〵バリ〳〵、のう〳〵こわや恐ろしや、身の毛をたててぞ語りける、大将胸さわぎして、ようこそ〳〵知らせたり、これが誠のちゆうちゆうと、みな〳〵天井へ、上りけり。

## 四、常磐津　神楽諷雲井曲毬（かぐらうたくもいのきよくまり）（どんつく）

三世桜田治助作詞、四世岸沢式佐作曲。弘化三年（一八四六）正月、江戸市村座初演。

はじめ源三位頼政と猪早太が鵺退治の振りがあって引き抜くと、この曲の踊りになるというもの。一種の風俗舞踊で、「どんつく」というのは、田舎者の下男が踊る囃子ことばであるが、その下男の代名詞にもなっている。

内容は、太神楽の太夫、若旦那、白酒屋、芸者、笛吹などがからんで踊るというもので筋らしいものはない。しかし歌詞も曲もせりふも江戸末期の初春気分をあらわしていて、単なる面白さ以上に大切な曲といわれている。

〈鹿島浦にはナア、コレワイナ、鹿島浦には、宝船がつん着いた。ひとのおかたも袖引き連れて、おやもさどうした。瑠璃や硨磲瑪瑙金銀琥珀珊瑚真珠も叉手もてすくう。いとしおさんに伊達さす恵み、是も鹿島の神の告げ。〈ヤレ〳〵、ご苦労ご苦労。併し肝心の大神楽を見てえものだ。どうする〳〵。〈ほんにさうだ。サア〳〵これから商売々々。〈ばいしよう〳〵。〈千早振りにし昔より、神をいさめの曲太鼓、八百や万の手をつくし、音もさえ渡る、庭神楽、これも神力加護毬や。二上り〈来た〳〵〳〵〳〵、もてこいなヨイ〳〵、肩に受け身の流し持、ヨイサ、抜けつくぐりつ、ひよいと止つた、柳に燕、籠に手毬のしやんと来い。落ちたら恥よ、落したら拾う袋持。〈コレどんつく、おぬしの国にやア、こんな意気なことはあるめいな。〈ほんにね、やれ〳〵井の中の蛙ツ子、大海を知らずの譬、雪国でこそあれ、おらア方で品やることは、江戸ツ子にやア出来るもんだんし。〈コレ江戸ツ子に真似の出来ねえということがあるものか。〈すんだらやるから真似して見さろ。〈こいつは面白い。〈サア真似事が出来るならやつて見さつせえ。エヘン〈そさまええならおんらもエエ、それで世の中どんとよい。どんつくどんつく〳〵〳〵〳〵どんがどん。〈何の造作もねえ。〈すんだらおらと同士にやつて見さろ。したが次第に早くなるのが伝授だア。江戸ツ子にやア出来るもんだんし。〈何まけるものか。〈エヘ、、、〈そさまええならおんらもエエ、それで世の中どんとよい。どんつく、どんつく、どんつく、どんつく、どどんがどん。〈ハ、、、。〈それはそうと、そのどんつくの唄にも何んぞ謂れのあることでござんしようナ。〈あるの段、かいつまんで話して聞かせべエか。〈コリヤ聞き事じやわいナア。〈さらば物語りのスベエカ、エヘン、〈そさまええならおんらもエエ、それで世の中どんとよい。どんつく〳〵〳〵どんつくどどんがどん。二上り〈あれを見さいな、あい〳〵山のあなたから、そさま手管に乗せられて、うからうつ惚れ込んで、すんべり過ぎたアエ、ほんね〳〵よ。〈銭落したで溝さえはまつてうつばしる。こいつもどんつくじやんけんな〳〵。人サ誹ろと馬の耳に風よ。すいせ〳〵。ドンどんつく〳〵。どんつくどんつくどん。サアア、ちげねのね〳〵真中じや。〈サア〳〵。是からお前方の色事話しが聞きてエ〳〵。〈その様な事は知らぬわいナア。〈イヤ〳〵知らぬとはいわせないよ。マア私が相手になつて、エエもコレ、〈なまじこうせぬ初めなら、思い切る瀬があろうのに、さりとはむごい胴慾な。そりやつれないじやないかいな。縺るる口舌のその中へ、二上り〈やんもしろや、ここも高天が原なれや。〈オヤ〳〵、これやアおかめさんおめかしだね。〈オヤ〳〵下の町の神主さん、きついお見限りだね。〈おかめさんお前髪がよく出来たネ。何という風だえ。〈アアこれかえ。コリヤ荒神さんのおそなえ風さ。この間もネ、アノお母さ

んがね。へおかめ〳〵と沢山そうに、いうておくれ毛そそげ髪、へ直してあげうと簪に、お前の紋の松だけは、へ癪に毒じやと初めて知つた。外の木の子の味知らず。へオヤ〳〵、お前何時おめかと名をお変えだえ。へアレサ人聞きの悪いよ。おめかだの何のといつておくれでないよ。へそれでもおかめの顔が逆様になつているから、おめかではないかえ。へドレと面を冠り直して、オヤモウ嫌だね。へ洗い髪の投島田を、根からふツつり切つて男の膝に叩きつけ、こん度から浮気をすると、芝居のお化じやないけれども、ひうどろ〳〵と化けて出る。へ情なし女め。外の男は振向いても見まいと、程のよい口車につい乗せられて、登り詰めたがこつちの行き止り。へ黒々だんべい、赤々だんべい。派手を見知らす鯨帯、雲に稲妻、光るが朱鞘に黒伊達羽織、またも目に立つ黒助稲荷の赤い鳥居が、すぼぼん花火の真の闇、熊に金時、日の出に烏、赤と黒との色競べ、へ悪魔降伏千代萬歳、目出度き春とぞ祝しける。

## 五、三曲櫻川

櫻川といえば、謡曲の狂女もので有名ですが、地唄ではそれから取材して、紀貫之の古歌を謡いこんであります。

曲の構成は三段形式で、前唄があって長い手事（間奏）から後歌でも花の美しさをたたえ、水のきれいな櫻川をほめてあります。曲の出が低二上りで、一下りを通って本調子になるという調子の変化があり、曲の進むにつれて高調してきます。京都の名作者として知られた光崎検校作の三絃曲に箏の手がついて、歌は短いが手事は長い曲です。

なお、櫻川というのは、むかし櫻の名所として知られた川の名で、茨城県の北那珂村から新治村を通って霞ケ浦へ入る川のことです。そこには櫻の銘木が多く、しかもそれがいづれも雅致に富んで品格が高いこと日本一といわれました。

へ新玉の春は氷もとけ初めて、浪の花こそよすらめと、せせの白波しげければ、霞をながす浮島の（手事）げにや面白や、昔の春も今もなお、変らで花の麗しき、水もにごらぬ櫻川。

## 六、清元 しめろやれいろのかけごえ 能色相図（神田祭）

三升屋二三治作詞、二世清元斎兵衛作曲。天保十年（一八三九）九月、江戸河原崎座で二世清元延寿太夫の養子二世栄寿太夫のお目見得浄るりとして初演された。

神田明神の祭礼は、江戸時代のはじめ将軍の上覧に供してから、山王祭とともに、御用祭、天下祭と呼ばれて有名であった。毎年大祭を行っていたが、天和ごろから山王祭と交互に行うようになり、大祭のない年は陰祭といった。江戸時代は九月十五日だったが、明治以後五月十五日に変更された。

歌詞は支離滅裂だが、いかにも神田の祭礼気分をしのばせる粋な味と、景気のいい節がついているので流行している。

へ秦の始皇の阿房宮、その全盛にあらねども、粋な心も三浦屋の、茶屋は上総屋両介と、気転も菊の籬さえ、山谷風流のあらましを、松の位の品定め、へ一歳を、今日ぞ祭りに当り年、警護てこまえ花やかに、飾る棧敷の毛氈も、色に出にけり酒機嫌、神田囃子も勢いよく、来ても見よかし花の江戸、祭に対の派手模様、牡丹、纐縝、裏菊の、由縁もちようど花尽し、祭のナア、派手な若い衆が勇みにいさみ、身姿を揃えてヤレ囃せ、ソレ囃せ、花山車でこまえ、警護に行列ヨンヤサ、男達じやのヤレコラサ、達引じやのと、いうちや私に困らせる、へ色の慾ならこつちでも、へ常から主の仇な気を、知つていながら女房に、なつてみたいの慾が出て、カンへ神や仏を頼まずに、義理も糸瓜の皮羽織、親分さんのお世話にて、わたりをつけてこれからは、世間かまわず人さんの、前はばからず引き寄せて、楽しむうちにまたほかへ、それから閻と口癖に、へ森の小烏われはまた、尾羽をからすの羽根さえも、なぞとあいつが得手物の、ここが木遣の家の株。へヤアやんれ引け〳〵よい声かけて、エンヤラサ、やつと抱き締め、床の中から、小夜着布団をなぐりかけ、何でもこつちを向かしやんせ、よい〳〵よんやな、よい中同士の、小いさかいなら、痴話と口舌は、何でもかんでも今夜もせえ、へ東雲の明けの鐘ごんと鳴るので仲直りすました、よいよいよんやな、そよが締めかけ中網、へえんや〳〵これはあれはさのえ、エンヤリヨウ、へげにも上な



き獅子王の、萬歳千秋限りなく、牡丹は家の物にして、お江戸の恵みぞありがたき。

## 七、長唄紀文大尽

中内蝶二作詞、四世吉住小三郎、三世杵屋六四郎（稀音家浄観）作曲。明治四十四年五月長唄研精会で発表。

長唄は、本来唄いものとして発生したものでしたが、時代とともに次第に浄るり（物語り）的な要素を含むようになり、物語り曲も作られてきましたが、その多くは謡曲の型式をまねたような類型的なものがほとんどでした。

この曲は、そうした型にはまらない、自由な形で新機軸をねらったもので、作詞作曲ともに相当な熱意で作られたものです。発表されたときは大へんな評判で、今日でも研精会の代表作といわれ、広く各流の人たちにも演奏されて、大流行しております。

曲の内容は、有名な紀国屋文左衛門の事蹟で、全体は六段にわけられます。第一段は歌詞なしの楽器だけで海上の暴風雨。第二段はそれが少しおさまって、悲壮な調の船唄、第三段は歓喜の調の船唄、第四段は、初代紀文の密柑船が遠州灘をのり切った様子。第五段は、そのみかんを神田の市へ運ぶ賑わいと出世開運。以上が初代紀文のことで、これを二代目紀文が夢に見ているという構成。

へ鳥も通わぬ八丈が島へ、通うわが身は厭わねど、あとに残りし嚊や子は、どうして月日を送るやら。へヤンラ幾夜あかしの浦漕ぐ船も、浮かれこがれてソレ磯へ寄る、サアーエッサー〳〵ヨイヤサノサッサ。へ時に正保元年霜月はじめつかた、続く嵐に海荒れて、船はものかわ空翔ける、鳥さえ通わぬ浪の上、柱も折れよ帆も裂けよ、経帷子に縄だすき、命知らずの船夫ども、櫓声合わせてエッシッシ、へたださえ難所と聞こえたる、遠州灘を乗り切つて、品川沖に現われしは、名にし紀の国密柑船、幽霊丸とぞ知られける。三下りへ積んだ密柑は八万五千籠、陸に運んで、車にのせて、のせた車は、八百五十輛、ひけやひけひけ、神田の市へ、へふいご祭りの折からに、密柑の払底時を得て、一挙に握る五万両、黄金の花咲く実も結ぶ、初代紀文が運開き、幸先よしや。本調子へ吉原の、里は闇なき喜見城、いつ更けたやら明けたやら、さいつおさえつ盃の、数重なりし酒づかれ、無明の酔にとろとろと、雪の朝の置炬燵、うたた寝の、夢の最中にまざまざと、ありし昔の面影を、見るも親子の縁かな。

几帳へ文さま、どうぞしたのかえ。へ背にやわ手の音かるく、優しき声にさまされて、　文左へそもじは几帳か。へなつかしき、その面影を見るにつけ、今のわが身の恥かしや。　文左へげに世の中は不思議なものじや、父は巨万の富を作り、われは巨万の富を消す。へ人は一代名は末代、作るも消すも世の中に、あつぱれ男とうたわれて。　文左へ紀文の名さえ残るなら、本望じや満足じやと、父は臨終の教え言。へ所詮浮世は夢じやもの、恋も無常もあるものか、へいや恋ゆえにこの苦労、傾城に誠なしとはてんごうな、そりやわけしりのいわぬこと、まことも嘘も本ひとつ、へしんぞ命とこつちから、尽くす誠は酌みもせで、逢瀬はかなき七夕の、雨に浪立つ天の川、通い路絶えておのづから、よそへ根曳きの身となりもせば、かけし誓いも嘘となる、へまた初めから偽りの、勤めばかりに逢う人も、絶えず重なるその時は、初めの嘘も皆まこと。　几帳へ縁のあるのが誠でござんす。　文左へされば我等も不即不離、昨日も一蝶が唄うた小唄に、はて何とやら。三下りへやぶれ菅笠、ヤンヤ締緒が切れていのオウエイ、さらに着もせず、エイサンサ、ヤアサンサへ棄てもせず。

文左へおう、そこへ見えたは二朱判吉兵衛、向いの茶屋で、奈良茂めが雪見の酒盛、今たけなわじやときいたはまことか。　吉兵衛へなか〳〵。　文左へ大尽冥利その雪消して、奈良茂めに鼻をあかすも一興、な、心得たか。　吉兵衛へ心得ました。本調子へ幇間の二朱判旨を受け、黄金色なす三百両、小判に小粒かきまぜて、黄色な雪がそりや降るはと、おもてにばらばら撒き出せば、甘きに集う蟻の群、人波どつと押し寄せて、こけつまろびつ奪い合う。へ塵もとどめぬ白砂の、雪の眺めもたちまちに、踏みかえされて泥の海。二上りへ沖のナア、暗いのに、白帆が、白帆が見ゆる、へあれはナア、あれは紀の国、紀の国、密柑船じやエ。

吉兵衛へ大尽舞を見さいな。へそも〳〵お客の始まりは、高麗唐土は存ぜねど、いま日の本にかくれなき、紀の国文左でとどめたり、へ緞子大尽張り合いに、三浦の几帳を身受けする、緞子三本紅絹五疋、綿の代まで相添えて、揚屋半四に贈らるる、二枚五両の小脇差、今に半四が宝物、ハハホ、大尽舞を見さいな。へ前代未聞の紀文が豪興、廓一番ならびなき、その全盛の一節を、ここに伝えて後の世語。